

■テーマ展

新収蔵資料展 2003-2005

会期 12月10日(土)~平成18年1月15日(日) 会場 特別展示室

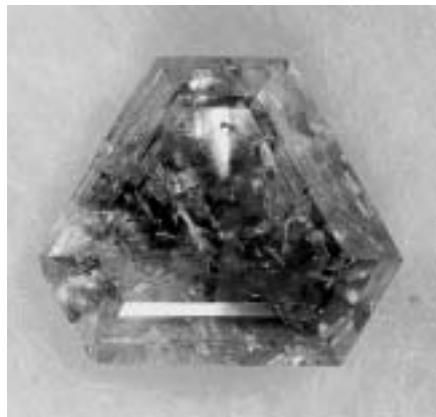
貴重な資料を収集し、後世に伝えることは、博物館の大切な活動の一つです。岩手県立博物館では、平成15年度に9,691点、16年度に10,542点の資料を新たに収集、登録しました。現在の資料総数はおよそ16万点。多くは博物館資料の充実のために寄贈していただいたものです。

今回の「新収蔵資料展」では、平成15年度以降に収蔵した資料や整理が終わった資料の中から、未公開のものを中心に展示します。

展覧会のみどころ

毎月の誕生石と県内産新鉱物

1月はガーネット、2月はアメシスト…というように、月ごとに誕生石があります。誕生石はお守りになると信じられ、人々が身につけ始めたのは18世紀ごろのポーランドといわれています。今ではその習慣が世界中に広がっています。このコーナーでは、毎月の誕生石を研磨した宝石と原石、そしてそれに関連するさまざまな鉱物を一堂に展示します。この中には2002年にデビューしたものの、そのまま絶産になってしまう可能性のある世界最新の宝石・ラズベリルなど、希少価値が高いものも含まれています。



世界最新の宝石 ラズベリル
(マダガスカル アンバトビタ産)

岩手県からはこれまでに国内では岡山県に次ぐ12種もの新種の鉱物(新鉱物)が発見されています。県内産新鉱物のコーナーでは、田野畑村から新たに発見された2種類の新鉱物(わたつみ石・カリリーク閃石)を中心に、これまでに同村で発見された新鉱物などを展示します。展示する標本には小さなものが多いのですが、彼らが発する豊かな表情をじっくりとご覧下さい。

台湾産チョウ類標本(佐竹義惇コレクション)

埼玉県在住のチョウ類研究家佐竹義惇氏が、長年にわたり台湾で自ら調査をしながら収集された標本11科329種841点です。学術的価値が極めて高いだけでなく、鑑賞してもたいへん美しいコレクションです。

この中からいくつか紹介しましょう。まず、アゲハチョウ科のフトオアゲハは生態が解明されていない点も多い珍稀種で、コレクターから最も人気がある種です。コウトウキシタアゲハやホッポアゲハは光の加減や角度で微妙な色の輝きを発します。一方色合いは地味ですが、深い味わいがあるのがジャノメチョウ科の仲間、カノクロヒカゲ、アリサンチャイロヒカゲは特に産地が限られる希少種でもあります。また、タテハチョウ科のマラッパイチモンジは、採集例が非常に少なく「幻の蝶」と言われ



コウトウキシタアゲハ
(1997年蘭嶼産)

ることもあります。

更に、台湾にはモンシロチョウやアゲハなどの日本でも馴染みのある種も見られ、東南アジアと日本をつなぐ興味深い分布の様子がわかります。

岩手のタケ・ササ標本(笹村祥二コレクション)

笹村祥二氏(1907-1976)は、三陸地方を中心に岩手県の植物を深く調べられたアマチュアの植物研究家です。笹村氏が生涯にわたって採集し研究した植物さく葉標本は2万数千枚を数え、一般には知られていない植物や、当時の高名な分類学者とのやりとりが記録されたものも多く、とても貴重なコレクションとなっています。

これらの標本を御遺族から寄贈していただいたのは20年近くも前のことでしたが、分類が難しい植物については、それぞれ専門家に見ていただく必要があるため、整理が遅れていました。笹村氏が1950年代以降特に力を入れて採集したササの標本4千枚はその例です。昨年すべてのササ標本の同定作業が終了し、今年度には目録が刊行されるのを機に、紹介することにしました。岩手県には80種類以上のササが生えていて、岩手県の地名に因んで名付けられたササがいくつもあると言えば、驚かれる方が多いでしょう。今回は、岩手県産のササ標



イワテザサ
Sasa yahikoensis var. *rotundissima*



オシドリ
Aix galericulata

本を1種類1点ずつ選び、展示します。

鳥の剥製標本

岩手県立博物館には、年間、約30種類ほどの鳥獣の死体が届けられます。県内各地から届けられる死体は、ただの死体ではなく、岩手県内に生息している鳥獣の実態を知ることができる重要な資料なのです。さらに日本一の剥製師である石川耕平氏に依頼し剥製標本にすることで、新たな命がよみがえります。

今回の資料展では、鳥の剥製標本ばかりを展示しますが、資料が入手不可能で早急に所蔵したい場合は、購入してでもその資料を揃えます。特にアリスイは、本州での繁殖記録がわずか3例しかない幻のキツツキでもあり、入手困難だったことから購入しました。イギリスのロンドンでは絶滅が宣言されているキツツキで、今後も世界的に減少の一途をたどる自ら穴を掘ることができない原始的な名残をとどめたキツツキです。

その他オシドリは、二戸市金田一の三葉沼でオオタカに襲われた個体です。キレンジャクやスズメの、みごとによみがえった姿もどうぞご覧ください。

岩手県史編纂資料 (小岩末治コレクション)

小岩末治コレクションは、『岩手県史』の執筆者として知られている故小岩末治氏が、その研究活動の中で収集した資料です。小岩氏は大正12(1923)年に生まれ、岩



岩手県史原稿
(小岩末治コレクション)

手県師範学校を昭和20(1945)年に卒業、昭和24(1949)年に胆沢郡南都田中学校に赴任し、ここで角塚古墳の調査、保存運動に携わるようになります。小岩氏は活発に活動し、これが岩手県史蹟名勝天然記念物調査委員の田中喜多美氏の目にとまり、『岩手県史』の編纂係に転身します。

県史編纂係でも非常に精力的に活動します。休日を返上して資料収集・踏査などを行い、『岩手県史第1巻上古篇、第4巻近世篇(1)』を執筆しています。東北大学の伊藤信雄氏をはじめとする著名な研究者との交流も盛んに行います。

今まで余り知られていなかった小岩氏の活動の具体的な様子について、『岩手県史』に関わる原稿、図版、書簡を通して紹介します。

岩手の歴史と文化

盛岡藩のお抱え絵師であった藤田家の資料(藤田幸子氏寄贈)、『伊達綱村領地宛行黒印状』、北上出身の刀工・齋藤正実(正中、1811~91頃)の脇差(梶谷命保氏寄贈)と短刀などを展示します。

藤田家の資料は、代々の模写絵や下絵、書留などが中心です。なかでも六代目の藤田祐昌に関わる資料が多く、その書留からは、江戸での修行に際しての藩への届出や仕送りのこと、藩の御用のことなどをうかがい知ることができます。また、江戸での修行中に描きためた模写絵等も多く残され



藤田祐昌の江戸修行中の模写絵
(藤田家資料)

ており、藤田家が学んだ狩野派の修行の様子がわかります。書留には家族のことなども記されており、お抱え絵師の日常をかいま見ることのできる貴重な資料です。

「伊達綱村領地宛行黒印状」は、四代仙台藩主・伊達綱村から家臣の須田三内に宛てられたものです。宛行状は藩主が家臣へ領地を給与する際に出すもので、須田家に給与された領地は、黒川郡駒場村(現・宮城県大衡村)、磐井郡東山黄海村(現・東磐井郡藤沢町)、大原村(現・一関市大東町)の三か村で、合計八貫九百四十三文となっています。

暮らしに彩り

盛岡高等女学校の図画教員をつとめた狩野存信(1845-1913)の「春秋山水図」、女性のオシャレの必需品であった和鏡、櫛、かんざし、笄など、暮らしに彩りを添える品々(金田一キミ氏寄贈)のコーナーです。

戦時下の暮らし

憲兵用の軍服(藤井幸子氏寄贈)や軍刀(秋津武三氏寄贈)、砲弾形の花活(小泉仁左衛門氏寄贈)など、世相を映す資料を集めて展示します。

展示解説会 12月17日(土)

14:00~15:00 特別展示室

学芸員が展示のみどころをご案内します。